

**科学技術人材育成のコンソーシアムの構築事業
次世代研究者育成プログラム
(実施期間：平成 26～33 年度)**

コンソーシアム名：京阪神次世代グローバル研究リーダー育成コンソーシアム

代表機関：京都大学（総括責任者：山極 壽一）

共同実施機関：大阪大学、神戸大学

取組の概要

近年、競争的資金等により雇用されるポストドクター等の若手研究者が増加し、腰を据えて研究する機会が奪われ、若手研究者の育成基盤が脆弱化しているとの指摘がある。これらの状況を打開するために、世界水準の優れた研究型総合大学（Research University）である京都大学、大阪大学、神戸大学をコア機関として、若手研究者育成のコンソーシアムを構成する。本コンソーシアムにおいては、「学問とは真実をめぐる人間関係である」、つまり人との交流を通じての学びを前提とし、国内最高峰の研究環境の下、次代を担う優秀な若手研究者の確保・育成を戦略的に行う。具体的には、①若手研究者の安定的雇用、②海外機関、産業界、異分野の研究者等との交流に基づく多様な経験を積む研鑽の場・プログラムの提供、③手厚い育成支援体制、研究支援体制を三位一体で構築し、独創的で世界を牽引する次世代グローバル研究リーダーの育成を目指す。

(1) 評価結果

| 総合評価 | 進捗状況 (全般) | 進捗状況 (システム構築) | 進捗状況 (取組の内容) | 体制構築 | 今後の進め方 |
|------|--------------|------------------|-----------------|------|--------|
| S | s | a | s | a | a |

総合評価：S（所期の計画を超えた取組が行われている）

(2) 評価コメント

国際公募による高い競争性の下、厳正に審査された次世代研究者をテニュアトラック制により採用していることは、高く評価できる。また、目標の育成者数を大きく超えた採用実績、育成支援プログラムの充実等、順調にプログラムが推進されているものと高く評価できる。さらに、世界水準の優れた研究型総合大学として、実施機関それぞれの強みや特色を活かし、人的交流に重きを置いた育成システムが組み立てられており、異分野間交流による俯瞰的視野を有するグローバル研究リーダーの育成に取り組み、成果をあげていることは、評価できる。一方、次世代研究者への支援体制は、複数メンター、専属 URA を配置し丁寧な支援が行われており、グローバル研究リーダーとなる次世代研究者の育成が順調に進むことを期待する。

・**進捗状況（全般）**：国際公募により計画数を大きく上回る次世代研究者を採用していること、テニュアポストが用意できる部局で年俸制の任期付き助教として次世代研究者を雇用していること、選定時のコメント等に適切に対応していることは、高く評価できる。また、異分野の研究者や企業の研究者を対象とした研究発表会の開催、産学間の交流プログラム（ファーストコンタクトプログラム）の実施等、取組は順調に進捗しており、今後次世代研究者育成のモデルプログラムと

なることを期待する。

・**進捗状況（システム構築）**：異分野連携、産学連携を見据えた次世代研究者のキャリアアップのための教育プログラムが豊富に準備されており、キャリアアップを図る仕組みが構築されていることや、企業交流会の開催等、産業界との交流が活発に行われていることは、評価できる。また、研究発表に対する多様な価値判断による評価のフィードバックは貴重な機会であり、採用された次世代研究者の研究業績について公正な評価が実施されているものと評価できる。さらに、年俸制による5年の任期付教員として採用し、流動性を確保する雇用形態となっており、テニュアポストへの移行も期待できるようにしていることは、評価できる。今後は、これまでに本事業を通じて構築した育成・支援プログラムの他機関への普及・展開やノウハウの共有を期待する。

・**進捗状況（取組の内容）**：テニュアトラック期間終了後のテニュアポストへの移行に積極的な部局を選定した上で、コンソーシアムで統一した公募様式を用いた国際公募を実施し、多くの応募者の中から、外部有識者も構成員とする公正な選考によって、多様な優秀な人材が採用されていることは、高く評価できる。また、複数メンターによる相談体制の充実や専属URAによるサポート体制、さらには、事務ワンストップサービス体制等のきめ細やかな研究支援体制が充実していることは、高く評価できる。今後は、流動性確保の観点から、他機関へのキャリアアップの可能性も視野に入れて取り組むことを期待する。

・**体制構築**：コンソーシアムの運営体制として、運営協議会の中に運営統括会議、運営会議、推進会議、選考会議等が機能的に配置され、実効性のある体制が整備されていることは、評価できる。また、3大学の学長を構成員とする運営統括会議を運営協議会の中に設置することにより、大学の最高責任者である学長がコミットし、リーダーシップを発揮して推進されていることは、評価できる。また、外部評価委員会が適切に機能しており、その評価を基に事業改善を行っていることは、評価できる。

・**今後の進め方**：京都大学独自の取組である白眉プロジェクトや、各大学で個別に実施されている次世代研究者育成プログラムを連携、融合させていくことで、6年度目以降も構築したシステムを自立的に維持継続し、さらに展開する計画は、評価できる。今後は、5年度目までに構築した成果や3大学の連携関係を広く普及させるため、補助事業期間終了後における自主財源の確保に係る具体的な計画を立案することを期待する。